

## 金－トランプ首脳会談：成功でも失敗でもなかった

ラメシュ・タクール

オーストラリア国立大学クロフォード公共政策大学院名誉教授、アジア太平洋核不拡散・核軍縮リーダーシップネットワーク（APLN）共同議長

PSNA ワーキング・ペーパー・シリーズ（PSNA-WP-3）

2019年3月6日

キャンベラ発——昨年6月にシンガポールで開かれた第1回首脳会談は、金正恩に対し、事実上の核保有国の元首としてドナルド・トランプ大統領と同等の立場で協議する正当性を与えた。2月27日～28日にハノイで開かれた第2回首脳会談はその地位を常態化させたが、実際に達成できたことはほとんどなかった。

トランプは、昨年以降、期待値を下げることに成功していた。北朝鮮の核の脅威はもはや存在しない、といった大口はすっかり影を潜めた。その代わりに、トランプは、完全なる非核化という「変革の目標」を、金正恩の核戦力の制限という「取引上の目標」に移行させた。関係改善と国交正常化の前提条件として完全かつ検証された非核化をもはや主張しなくなり、代わりに、非核化と平和的な関係の構築に向けた同時的、平行的措置の原則を取り入れてきた。

ハノイ会談は成功でもなければ失敗でもなかった。ホワイトハウスのサラ・サンダース報道官は、「今回は合意については見送られた」が、両国の指導者が「非常に友好的かつ建設的な会合」を持ち、「非核化を前進させる様々な方法を議論した」と語った。トランプは、寧辺の核施設を解体する見返りに、金が制裁の全面解除を要求したことが合意を困難にしたと述べた。これに対し、北朝鮮の李英鎬外相は、同国が求めたのは制裁の一部解除のみであると反論している。

ハノイ会談が行われている絶妙のタイミングでカシミール危機が激しく再燃したことは、朝鮮半島問題に関するトランプの行動の論理を明確に示している。北朝鮮の完全かつ不可逆的な非核化を主張するという、四半世紀以上も明らかに失敗してきた政策を捨てることには大きな痛みは伴わない。誤解を解くための実務的な関係を確立し、信頼と信用を構築し、南北関係を深化させ、壊滅的な結果をもたらす戦争のリスクを別のやり方で大きく減らすべく、金との個人的関係を作っていくこと、それこそが今や大きな獲得目標になったのだ。

トランプは、戦略に対する彼の無知さゆえに、外国の危機に対し軍事一辺倒でしか対応できなくなってきた米政府の戦術書を妄信している人々の多くよりも、背景にある大局的な現実を直感的につかみ取っているのかもしれない。首脳レベル・高官レベル・実務者レベルのすべてにおいて、南北朝鮮間および米朝間のコミュニケーション・チャンネルは活発化している。これは良い兆候である。

とはいえ、たった一つの主要核施設を廃棄する見返りに制裁を全面解除せよとの北朝鮮の要求を突っぱねたトランプは正しかった。金はトランプの意図を見誤っていたのだろう。元顧問弁護士の議会証言をはじめとして、トランプにとっては悪化する米国内情勢を帳消しにする勝ち点を得ようとして、トランプが取引を、それがどんな取引であっても成功させるべくやっきになるだろう、と。しかし、トランプはまだそこまで追い詰められてはいなかったのだ。